令和４年度第１回白河市総合教育会議

議事録

１　日　程　令和４年１２月２２日（木）

２　場　所　市役所４階全員協議会室

３　開　会　午後１時３０分

４　出席者

（１）　構成員

職名		氏名
市長		鈴木　和夫
教育委員会	教育長	芳賀　祐司
	教育長職務代理者	高橋　顕
	委員	北條　睦子
	委員	沼田　鮎美
	委員	瀧澤　学

（２）　市職員

職名	氏名
市長公室長	鈴石　敏明
市長公室企画政策課長	深町　洋介
市長公室企画政策課企画政策係長	星　大介
市長公室企画政策課企画政策係副主査	坂本　美咲
教育委員会事務局理事兼教育部長	水野谷　茂
教育委員会事務局教育総務課長	藤井　浩司
教育委員会事務局学校教育課長	稲川　竜寿
教育委員会事務局学校教育課主幹兼課長補佐兼指導係長	仁科　英俊
教育委員会事務局学校教育課指導主事	菊池　理文

５　議　事

（１）市教育大綱に基づく「郷土を知り、郷土を愛する人」育成のための取り組みについて

（２）その他

６　閉　会　午後２時４５分

１．開会

○**事務局（司会）**　令和４年度第１回白河市総合教育会議を開催する。
原則通り会議を公開とし、傍聴を許可する。

２．議事（１）市教育大綱に基づく「郷土を知り、郷土を愛する人」育成のための取り組みについて

○**事務局（司会）**　白河市総合教育会議設置要綱第４条第３項の規定により会議の議長は市長とする。

○**鈴木市長**　議事（１）の「市教育大綱に基づく「郷土を知り、郷土を愛する人」育成のための取り組みについて」について、事務局より説明を求めます。

○**事務局**　「白河歴史文化再発見！事業」は、自分の生まれた白河の歴史や文化を知り、ふるさとに誇りを持つことを大きな目的としております。

先人より紡がれてきた郷土の長い歴史と豊かな文化を受け継ぎ、将来に繋ぐ、未来を拓く人間力を育むということでございます。

教育大綱には８つの項目がありますが、「郷土を知り、郷土を愛する人」が一番上に挙げられており、非常に重要な項目であると認識しておりますので、全体構想図というものを作成し、小学校１年生から小学校６年生、さらには中学校１年生から中学校３年生まで、体系的に学習できるように計画を立てております。

郷土学習というのは、白河に限らず他の市町村の学校でも行っておりますが、このように小学校１年生から中学校３年生まで、体系的に学習しているということは、白河市独自の特色ある取り組みであると考えております。

次に教育委員会の重点施策です。この重点施策の中にも、郷土の歴史教育の充実というものを設けており、郷土愛を育む教育を推進するとともに学習成果を児童生徒が自ら発信する機会を設けるという取り組みを行っております。

具体的には、小学６年生が市立図書館「りぶらん」で学習成果を新聞にして発表したり、あるいは中学校３年生に、郷土愛学習の集大成として市長と直接意見を交換する「白河未来フォーラム」という取り組みを行ったりしています。

なお、先日、関辺小学校の取り組みが福島民報新聞で大きく取り上げられました。「福島ジュニアチャレンジ」というもので、地域の宝を守り、発信する活動とアイディアを称える取り組みで、関辺小学校の５、６年生が受賞しました。白河の関をどのように盛り上げていくのか、南湖公園、だるま、小峰城など子どもたちが地域学習を通じて学んだことを発信する活動も行っております。

それでは、各学年でどのようなことをやっているか、主なものを紹介します。

まず、小学１年生は、「昔の遊びを知る」ということで、地域のご年配の方に

ご協力いただきながら、あやとりやけん玉、おはじき、竹馬などの昔遊びを学ばせていただいております。

小学２年生は、「地域の昔話を知る」ということで、「しらかわ語りの会」の方などを講師にお招きし、乙女桜や白河地方に伝わっている昔話を語り聞かせていただいております。

小学３年生は、「昔の暮らしを調べる」ということで、昔の農村の暮らしがわかる農具などが展示されている表郷の鈴木家住居や、大信にあるふるさと文化伝承館を訪問し、昔の暮らしの様子を実際に目で見て、手で触れながら学習するような取り組みを行っております。

小学４年生は、「自分たちの生まれ育った地域を調べる」という活動です。提灯まつりの体験や、谷津田川と阿武隈川が合流するあたりに五箇関というものがあり、そこから引かれている五箇用水によって肥沃な米どころの五箇地区が生まれたということを、地域の方々にご協力いただきながら学習しております。何もしなくても五箇のすばらしい田園地帯ができたわけではないことを、子どもたち自らが現場を見て学習する機会が得られています。

小学５年生は、「伝統文化にふれる」ということで、茶の湯の歴史、茶道体験をさせていただいております。白河には「翠楽苑」というすばらしい施設があり、茶道連盟の方が一生懸命に茶道をやられておりますので、地域の施設や地域の方々にご協力いただきながら、茶道体験をしております。静かな日本の伝統文化にふれながら、他の地区ではできない体験ができることは大変ありがたいと考えております。

小学６年生は、「白河の歴史や文化を探検する」ということで、小峰城の見学や、文化財課の学芸員の方に石垣の復興についてご説明いただきながら学習しております。また、中山義秀記念文学館を訪れ、中山義秀の業績など白河の様々な歴史について学習する機会を設けております。

さらに、そういった学習の成果を、６年生を中心に壁新聞にまとめ、各学校約２週間ずつ「りぶらん」に展示し、発信しております。「りぶらん」を訪れた方々からは大変好評をいただいているという話を伺っており、親御さんもお子さんの作品を見るためにずいぶん足を運んでいるようです。

中学１年生になりますと、座学が多くなってしまうのですが、「白河の古代を調べる」ということで、市内にある下総塚古墳や舟田中道遺跡などについて文化財課の方にお話しいただき、実際に白河地域で出土した実物の土器に手を触れながら学習を行っております。

中学２年生は、白河を発展させた松平定信公について、「れきしら」を参考にしながら定信公の業績について学習しております。

中学３年生は、これらの教材を学習した集大成とし、「白河未来フォーラム」

として、子どもたちにこれからの白河のまちづくりに目を向けてほしいという思いもあり、市長が市内のすべての中学校をまわりまして、子どもたちと意見交換をしております。子どもたちの記憶の中に、市長と白河の未来について意見を交わしたというのは、必ず心の、頭のどこかに残るものだと思っております。それが将来、芽を出すときがくるのではないかと期待しております。

次は、各学校独自に地域との関係から伝統文化を学習しているものをいくつか紹介します。

五箇小学校では、地域の方のお力添えをいただきながら、生糸づくりをしております。白二小ではだるまの絵付け体験、小野田小学校では紙漉きを体験しています。昔、東地区は「こうぞ」がたくさん栽培されていて、それを浅川地区に出荷していました。そして、「こうぞ」が山にたくさん残っていることに着目し、昨年と今年は紙漉きをしました。昨年は自分の卒業証書をこの紙漉きで作りました。また、小野田小学校では狛犬に関する学習も行っております。小野田地区には鹿嶋神社に狛犬の傑作があります。こちらも地域の方にご説明いただきながら学習しております。

表郷中学校では和太鼓の体験学習、東北中学校では安珍歌念仏踊りを披露しております。安珍清姫の物語は、道成寺という能や歌舞伎、浄瑠璃などの世界で昔から大変有名な演目です。その主人公の 1 人である安珍の出身地が小田川なので、こういった取り組みを子どもたちが代々受け継いでいこうとしております。

教職員についても、県内各地から白河に来ておりますので、子どもたちに教える前に白河について勉強しようと、毎年夏休みに入ってすぐに研修を行っております。

こういった取り組みの結果ですが、小学６年生、中学３年生にアンケート調査を実施したところ、小学６年生、中学３年生ともに、「白河の歴史や文化を知ることで、ふるさと白河の素晴らしさを感じるようになりましたか」という設問に対し、「そう思う」と回答した割合が高く、白河の素晴らしさを感じてくれたことがわかります。中学生になると、「そう思う」の割合が下がっていますが、小学校までは体験的な学習が多く、中学校では座学が多いということも影響しているかと思います。

この事業に対する児童生徒や保護者、教職員の反応は、児童生徒からは「白河の歴史をより身近に感じることができた」という声があり、中には休みの日に子どもたち同士で、自分からその地域の歴史の文化を調べに行く子どももいるようです。保護者からは「いい事業なのでぜひ続けてほしい」というご意見や、「学校便りなどでもっとＰＲしてほしい」というご意見もいただきました。教師からは、「歴史文化を学ぶことによって、より未来に繋がる勉強ができているのでは

ないか」、「６年間を通じて歴史のまち白河にふさわしい学びができているのではないか」というコメントもいただいております。

最後になりますが、１１月１７日に、市内の小中学校の校長会を開きました。その中で、この「歴史文化再発見！事業」に関し、校長先生方からは、「ふるさとを知り、誇りを持つ姿に近づいてきている。郷土愛を育む良さを感じている」という肯定的なご意見をいただいております。

ぜひ、今後もこの白河独自に取り組んでいる体系的な「歴史文化再発見！事業」を継続し、学校をバックップしながら、子どもたちの郷土愛を育みながら、しっかりとしたアイデンティティを持った大人になっていただき、将来の白河の発展に役立つ、あるいは、白河の外に出ていったとしても、しっかりと根のある白河出身の人間として活躍できるように、そういった教育を目指して、取り組んでまいりたいと思います。

○市長　この事業は、白河市歴史的風致維持向上計画の認定を受け、「れきしら」という副読本を作ろうということになってから始まったと思います。そこから各小中学校に内容をきちんと伝え、白河に転勤してこられた先生方もよく勉強されて子どもたちに伝える、あるいはフィールドワークを通じながら少しずつ白河の歴史文化、そして郷土史に対する興味や関心の拡大につながってきたのではないかと思います。子どもたちの心の中に根付くまでいったかはわかりませんが、ある程度認識されてきているのではないかと思います。

高橋先生は教育委員会におられましたので、その頃に担当されていたのではないかと思いますが、今の説明に加えて、自分が学校の現場で実践したことや、こういうことは良かった、あるいはこういったとこにもう少し力を入れた方がいい、ということがあればご意見を伺えないでしょうか。

○高橋委員　教育委員会が進めているこの「歴史文化再発見！事業」は、縦の流れだと思います。例えば、東北中の安珍歌念仏踊りは、この「歴史文化再発見！事業」を始める前から東北中で取り組んでいたものだと思うのですが、この流れとうまくクロスすることで、その舞台になっている時代背景を、より深く理解できるようになっているのではないかと思います。

多分、安珍歌念仏踊りだけをやっていた時期だと、踊りに対して指導は受けたと思いますが、その時代、その周りの人々のことについては学ばないで終わってしまっていたと思うので、そういう背景も含めて学習することができていて、いわゆる学習の深まりということに繋がっていると思いました。

私も東北中で一年間だけ非常勤講師をやっていました。その時に安珍歌念仏踊りを指導し、念仏を唱えて壁を叩くというパートを担当しましたが、地域の方

にも教えてもらいながら子どもたちと一緒にやった思い出があります。
　そういう意味では、各学校でやっている既存の取り組みが、この教育委員会の取り組みを継続していくことで深めることができると思っています。また、中学校から見た時に、小学校でどんなことをやっているのかということを理解しておかないとまずいかなと思いました。

○北條委員　発達段階に応じた、小学校１年生から中学生までの歴史文化の学習は、歴史と文化の深い白河市だからこそできるのだと思っております。小学校１年生のところは、私が子育てしている時にうちの子どもも勉強しました。合併してから、この上の段階について子どもたちが勉強できるようになったので良かったと思います。
　子どもたちがこんなにいい授業を受けているので、親も同じことを知れば一緒になって、もう一度その場所に家族で行ったりできると思います。
　私は福島市の出身ですが、福島市には、義経の家来、佐藤継信・忠信の兄弟が医王寺に祀られております。それを小学校の遠足で行きまして、人形もありましたので、親にせがんで何回か連れて行ってもらいました。
　そういうものをとても誇りに思いました。こんなに有名な武将の家来が、福島市にも祀られているのだということで、歴史や文化を知るきっかけになるので、中学生の無味乾燥な歴史や社会の勉強が、しっかり土台を作っておけば、ただ単に暗記の学習ではない素晴らしい学習になると思いました。

○瀧澤委員　小学校１年生から中学３年生まで段階に応じて色々なテーマを持って、こういった歴史をはじめ、地元について知るというのは大変大切だと思います。
　この地域の歴史や先祖などを理解し、学習しながら自分の生きる道を一つずつ進んでいくということは、とても大事ではないかと思います。白河には歴史があり、戊辰戦争もあり、この地域に色々な偉人が宿泊し戦ってきたということもあります。そういったことは、確かに子どもたちには強烈な部分もあるのかもしれませんが、大人になってはじめてこの地域がやはりすごいということを知ることができる。
　北條委員と同じで、私も元々この地域の人間ではないので、そういったものは学習の中ではあまり取り入れられていませんでした。成人してからですが、徐々に歴史を意識するようになって、この地域にいるということをこういったことを知ることによって誇りに思える。これから生きていく上で、私たちのような年代でもそう感じるので、子どもたちはすごく感じるのかなと思いました。

○沼田委員　私も白河の出身ではないので、ここに来てから勉強すること、教育委員になってから勉強することがたくさんありました。子どもたちの成長と一緒に、色々な学校でこういう勉強をした話をよく聞いていたのですが、改めてこうやって白河のことを一から学んでいくのだなと思いました。

白河には大学がないので、将来一度外に出ていく子が多いと思います。でも、これだけ魅力のあるまちであれば、将来白河に戻って住みたい、勉強したい、仕事をしたいという人が増えるのではないかと思っています。

○教育長　私は誰もが必ず郷土愛、自分が生まれ育ったところを愛する気持ちを生まれながらに持っているのではないかと思います。

私は表郷出身ですが、世界でそこが一番素晴らしいから愛しているわけではないです。自分が生まれたところだから、愛しているのです。

大人になって都会に出ていって、そこがすごくいいと、自分が生まれ育ったところは不便で何にもないと言うけれど、でも、生まれ育ったところがいい。それを本能的に持っていると思う。

大学に行って表郷を離れて、福島県出身の先輩に面倒を見てもらったり、逆に自分が福島県出身の後輩を可愛がったりしました。プロ野球もサッカーのＪリーグも地区ごとにやっていますよね。今回のワールドカップでアルゼンチンが優勝しましたが、熱狂的になるのも郷土愛がベースなのかと思います。何もしなくても郷土愛はあるのですが、子どもの時分からこうやって学んで身に着け、潤って充実したら、子どもたちがまた新たなエネルギーを持てるのではないかと思います。

教育関係の専門的なことですが、平成１８年に教育基本法が全面的に変わり、教育の目標が５つ出ました。その中にこんなことが書いてあります。「伝統と文化を尊重し、それらを育んできた我が国と郷土を愛するとともに、他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養うこと」。つまり、自分の住んでいるところの歴史と文化を学習すれば、自分の住んでいるところにこういうことがあったとすれば、当然他の国、地域にもそういう歴史、文化があることがわかります。自分にあるのだから、相手にも当然ある。そうすると、相手を尊重します。そういうことによって、これから国際的な大きな世界にいく子どもたちが、その時に、相手の国の文化をきちんと尊重して受け入れられる。国際平和、国際理解にも繋がっていくのではないかと思いました。

ですから、この授業は本当に素晴らしいと思っています。私も今までいくつかの学校にいましたが、体系的になっているところはありません。自分の学校の近くのお祭りを少し調べるような学習しかありません。それが体系的になっているのは、素晴らしいと思います。

これをさらに続けていければと思うのですが、課題はあると思います。マンネリ化してしまうとダメなので、先生方に毎年、年度当初の校長会でやる意義を話していますが、きちんと掘り起こして、みんなで理解し合って継続していくべきだと思っています。

それから、小野田で狛犬の学習が始まりましたが、まだまだ各地区にいろいろなものがあると思います。先ほどの五箇関、五箇用水について、私も全然知らなかったし、もっともっと小さいこともあるのかもしれない。そういうところをまた、掘り起こしながらやってみるといいのかなと思っています。

○市長　教育長は表郷の三森で、私も小松というところですが、小松という地名がどこから来たのかよくわかりませんでした。しかし、正確かどうかわからないけれど、平清盛の小松守という息子の領地だったらしい。それで小松という名前がついたと言われています。平安時代の平清盛の息子が所有していた領地で、そこから小松という名前がきたという話が本当のことかわかりませんが、そういったことを聞くと、平安時代がそんなに遠くなく感じました。

昔の人は必ず名を名乗る時に、どこ出身の誰だと名乗って戦った。源平合戦のときに、奥州白河のなんとかだ、と自分の故郷や生まれを出して名乗って戦いました。歴史や文化ということを言う前に、やっぱり我々の本能的なものだと思います。それを体系立てて教えるだけでも、十分だと思います。あとは子どもたちが興味を持てば、どんどん勉強していきますよね。そういう勉強の場づくりを与えてあげる、教えてあげることによって、子どもたちの視野が広まると同時に、自分が将来大人になっていろいろな苦しいことがあっても、やっぱり故郷のことと結びつけて考える。

これを機械的にやらねばならないとなると冷たくなってしまうので、数学や国語のように、通常の授業の中に組み込まれないようにした方がよいのではないかと思います。特別な時間という位置付けをする必要もないと思いますが、普通の歴史を教えているような感覚で教えるのではなく、ということは続けていってほしいと思います。

実は、そういった教育を受けてこなかった親御さんの方にも課題があります。７、８年くらい前から始まっているので、そういう子たちが成長しいずれ親になるので心配ないと思いますが、今、４０、５０代の人たちは教えられてこなかった。もちろん、私だって教えられていない。故郷への関心を持つかは子どもごとに違うと思いますが、少なくとも頭の中のどこかには残っている。そうしてさらにその子どもに伝承していく。自分の代だけではなく、次の世代に繋いでいくという意味でも大きな意味があります。

これからの社会に何が大切か。もちろん経済も大事だし、福祉も子育ても全部

大事です。特に経済とか軍事案という、ハードパワーといわれるものは数字に見えてきますが、当然ソフトパワーも大事です。歴史文化や郷土への誇りなどがソフトパワーで、いわゆる豊かさ、最近ウェルビーイングという言葉を使いますよね。ある県では、幸福度調査をやっていますが、なんとなく幸せ、住みやすいような感じの中の大きい部分を、歴史や文化、人間関係も含めて、ソフトパワーが大きな影響力を持つ。

２１世紀は経済の時代から文化・芸術の時代に入るのではないかという人もいるぐらいです。日本の文化、歴史は素晴らしいものだと思います。能にしても歌舞伎にしても、学問にしても、いろいろな文化があります。スポーツもそうだと思います。相撲や柔道も、日本人独特の非常に繊細なものの考え方は、世界に冠たるという表現がありますが、そういうものだと思います。

いたずらに自信を失うことはなく、また、いたずらに驕ることもなく、そういう子どもたちを育成していくことが大事なのではないかと思います。

あとは、皆さん、こんなふうにしたらどうだろうか、付け加えたらいいのではないかということはありますか。

○高橋委員　学習にかける時間の問題もあり難しいとは思うのですが、第二次世界大戦、太平洋戦争のころの人が今はまだ生きているので、その人たちの話を直接聞くことは、今だったらできるのかなと思います。たとえば中学校３年生だったら、そういうことを受け取れるような時間を作れるかと思っています。

『ラーゲリより愛を込めて』という映画があります。別の学校にいたときに、実際にそのラーゲリにいた人と面会して、収容所の話を聞かせてもらったことがあったのですが、もうとんでもなくすごい話で、一緒に行った中学生の女の子が泣いてしまいました。そんなことがあったとは知らなかったと言っていましたが、隠された思い、それから、戦争に行かなかった人たちもかなり苦労して生活したのはいろいろと本になったりしていますが、そういうことについても、なにか触れる機会があってもいい。そうすると、ウクライナの人々が苦しんでいる様子に共感できる要素は強くなる。

私の義理の母は戦争を体験し、疎開した先でいじめられ、芋ばかり出てきて芋なんかもう絶対に食べないなんて言うくらいでした。義理の母が、電気も水もないのが大変だと、やっぱり戦争は大変なのでやってはいけないのだと、思いを強くして話しているのを見ると、そういう人がせっかく身近にいるのだから、何か取り入れられることはないかなと思います。

ただ、時間が確保できず、校長先生やそれを担当する先生には重いのかなと思いますが、そんなところにも手を伸ばせたらなと思っていました。

○市長　表郷では、太平洋戦争に従軍した人に話を聞いたり、太平洋戦争の時に使った街灯や靴などを展示したりしていますが、そういったものを少しでも残しておければという気もします。太平洋戦争で従軍した人たちがもう９５、６歳になっているので、今が最後の生き証人ですね。

沖縄ではそういった人から話を聞くということをやっていますよね。沖縄戦を経験した女性の方が、語り部として沖縄の高校生や中学生に教えている。そういったものは、今しかできないもしれないですね。あるいは従軍していなくても、戦後いろいろな苦労をされた方もいると思いますし、ウクライナの問題があれだけ放映されていて、あれに近いことも日本であったわけです。そういったことも含めて、実証教育というのか、そういうものもあってもいいのかなと感じました。

○北條委員　私は家業で果物を作っておりますので、市内で売るという機会がたくさんございます。その時に気が付いたのは、若い人が家業を継いで物販にいらしていることです。長男だからということではなく、多分元々あるものの良さを知って、自分のところを盛り上げていこうと感じていらっしゃると思います。その地域の産業の歴史、そういうものも組み込んでいくといいかと思います。

たとえば、小野田でしたら、昔は１００丁歩ほどの梨畑があったらしいのですが、果物農家もだんだん減ってきています。そういう産業の歴史を、こういうものに入れたらいいかなと思います。

○市長　そうですね。私が小さい頃は、米はもちろん、大豆も作っていました。味噌や納豆、麦も作っていました。あとは、米の合間に繭、蚕さんを作って、旗箱を作ってなんてことは当たり前でした。

昔は米だけではなくいろいろなものを作っていて、それが百姓というのでしょうけれど、単品になってしまった。産業の歴史とおっしゃいましたが、そういったものが実はずっと歴史としてあった。農業文化、もちろん米を中心とした文化で、いろいろな伝統芸能やお祭りも全部米に由来しているけれど、それ以外のものもたくさん作っていた。

そういう産業の歴史も大事なことだと思います。そうすると、もっと教え方にも幅があるのかもしれません。郷土史と繋がっているので、産業の歴史を先生方も勉強しないといけない。みんな経験していないので、産業の歴史を教えるのは難しいかもしれません。文献で見ればわかるかもしれませんが、昔の人だったら覚えています。今７０歳、８０歳以上の人だったら覚えています。そういう人たちから聞いて、それを求めるということもいいかもしれません。

○瀧澤委員　私も生まれ育ったところは違うのですが、大信に４０年近く住んで、最初のうちはやはり何もないなと確かに思いました。長くいろいろな方にお世話になって生活しているうちに、この地域を好きになっていったのですが、やはり人口も減っていて、地域的にはこれといった特徴がないような感じもしました。

しかし最近は、中山義秀文学館やふるさと伝承館、こういったところは子どもたちが歴史を学ぶのには有意義な場所だと感じます。それにプラスアルファ、大信はどこがいいのかとなった時には、やはり聖ケ岩です。ここは道も悪く、交通の便も悪くて何もものがない。ただ、ないからいい部分もある。携帯も繋がらない中で、大信だけでなく白河の子どもたちが、キャンプもそうですけれど、いろいろな活動ができればいいのかなと思います。

○市長　なにか揃っていることが必ずしもいいとは限りません。何もないからいいという人もいます。

つげ義春という漫画家がいて、天栄の奥の方の温泉に泊まり、そこが素晴らしく気に入って漫画を書きました。本当になにもないところです。でも、そこが気に入って長逗留して、それをベースに本を書きました。

何をもって何もないというのか、物があるからなのか。豊かな自然があって、隈戸川があって、聖ケ岩があって、澄んだ空があって、きれいな水があって、虻がいて。虻はきれいな土地にしか住まないですからね。虻に刺されると痛いということ自体も、これでひとつの価値観ではないですか。我々はひとつの価値に染まっているんですよね。東京という価値に染まりすぎている。

瀧澤委員がおっしゃったように、何もないと言ってはいけないと思います。これが足りないというのではなく、あるものを言う。誰かがあるもの探しと言いましたけれど、あるものを探していけばいい。

○沼田委員　先ほど、子どもたちにはしっかり教育ができているけれど、３０代や４０、５０代の、こういう歴史を知らなかった世代は白河に対する愛が少ないというような話があったと思いますが、私も子どもたちと一緒に勉強することによって、自信をもって今、自分が育ったところよりも白河が一番好きと言えます。

子どもたちもそういう気持ちでいると思いますが、一方で、先ほども話したように働く場所を考えると、白河だと少なく、ここでずっと、というのは考えてしまう子どもたちは少なからずいると思います。

戻ってくる方、住む方が少なくなれば、福祉や教育にも影響が出てくると思うので、これからはもっと歴史とデジタルとの組み合わせというのに力を入れて、

ここにいてもしっかりと生活基盤が作れるということを教育に取り入れる。今も十分取り入れていると思いますが、今の子どもたちは１人１台デジタル機器を持っていて、私たちとは全く感覚が違います。それ１台あればいろんなことが調べられ、世界中と繋がっていられるという中で、住むのは白河でいいけれども、仕事をするも白河がいい、他とも繋がっていられるというのをもっと強調できたらいいのかなと思います。

○市長　今回は産業等の話はしませんでしたが、産業なくして地域の振興はありません。農業も含めてです。一方で歴史文化がもっと増えてほしい。これは両立しなくてはなりません。

産業は非常に大事で、産業のことを無視した議論というのは意味がないと思います。根っこに産業、食べていくものがあって初めて、その上に歴史文化が育つ。産業なくして歴史文化はなかなか育たないですよね。そこで生活できない。だから、産業が根っこにあるのを前提とした上での議論です。

否応なくデジタル化は進んでいきます。デジタル化はもちろん生産性を高めて、経済の効率性を高めるでしょうが、文化や歴史、茶道、華道や書道もそうですが、これをデジタル化できるでしょうか。できませんよね。こういったものは併存するものだと思います。

そこで、いわゆるウェルビーイングになるのだろうと思います。ただ、これは前提に産業の振興が欠かせません。若い方々が戻ってこないというのは、大学がないからだということもあります。しかし、地方の産業構造は工場が主体です。頭脳は東京です。優秀な子は東京に残るのは当たり前ですよね。優秀な大学を出た子はこっちに働く場所がありません。司令塔は全部東京か大阪でしょう。

だから、地方に試験研究機関のようなものを作って、残念ながら本当の頭脳は東京なので、ここに準頭脳のようなものを作り上げるということは必要だと思います。これからはそういう時代になるし、デジタル化が進めば東京でなくも十分に対応できます。これからそういった時代を迎えていくので、地方に可能性があるとずっと言ってきました。時代は東京への求心力から、東京からの遠心力が働いていくと思います。それは５年、１０年かかると思いますが、その単位で見ていくと、１０年後に振り返ったときに、あの頃は時代の大きな転換点だったと思うと思います。今いるものはわからない、今こうやって進んでいるものにはわからない。

あるいは、コロナが社会を大きく変えたということになると思います。それが地方にどういう影響をもたらすかということは、多分この後結果が出てくると思うので、我々行政の仕事は、デジタル化を進めつつ、産業の基盤を作りつつ、文化や歴史、郷土愛を育んでいく。端的に言えばそういうことだと思います。

これが当たり前にならないように、当たり前になっていいけれど、感動がないような授業の一環としてこなすというのはダメです。こなす作業ではダメ。これをきちんと教えて、感動をもって自分も先生方も勉強して教えてほしいです。

○事務局　体系化されたこの「歴史文化再発見！事業」をベースに、学校がいろいろな取り組みをやっていただいていることは、非常に効果が上がっています。ご意見を参考にさせていただきます。

３．閉会

○事務局（司会）

令和４年度第１回白河市総合教育会議を閉会。